

各教科等と道徳の時間との関連的な指導を工夫し、  
進んで人間関係をつくる力をはぐくむ道徳教育

福山市立野々浜小学校

はじめに

本校は、福山市東部に位置し、1学年1学級の小規模校である。地域の人々は、子どもは、「地域の宝」とし、児童を温かく見守り、育てようという気持ちが強く、スクールサポートボランティアの方々による登下校の見守り、ゲストティーチャーとしての授業への参加をはじめ、学校に対して協力的である。また、とんどや「福祉を高める会」などの地域行事に児童が参加するなど、地域の人や文化に触れる機会も多く、児童と地域とのかかわりは深い。これらの地域の特色を生かし、より多くのかかわりの中で児童の道徳性を育みたいと考えてきた。



【地域の方とともに取組む栽培活動】

昨年度まで、学校ではたてわり班活動などの異学年交流や、全校音楽や全校体育など全校で一つのことを成し遂げる喜びを味わえる体験活動、また地域の方とともに取り組む栽培活動などを進めてきた。また、道徳の時間においては、資料提示や発問の工夫など、児童の心に響く授業づくりをめざして取り組んできた。児童アンケートで「道徳の時間がためになると感じますか」に対して肯定的評価が高いなど、児童は道徳の時間を肯定的に受けとめている。そこで、さらに道徳性を高めるため、様々な体験活動や道徳の時間の学習を通して学んだことが、児童の日常生活における道徳的実践にまでつながるようにしたいと考えてきた。

そこで、今年度は、「野々浜のよさ『人とのかかわり』」を、学習プログラムや日常生活の場面に生かしながら、道徳的価値を追求し進んでよりよい人間関係をつくり生きていく児童を育成する取組みを進めることとした。

今回改訂された小学校学習指導要領においても、「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない」と示され、教育活動全体を通じて行う道徳教育と、それらを補充、進化、統合する道徳の時間の指導とが十分関連をもって機能すること、また、豊かな体験活動などを通して、調和のとれた形で児童の内面に根ざした道徳性を育成することが求められている。

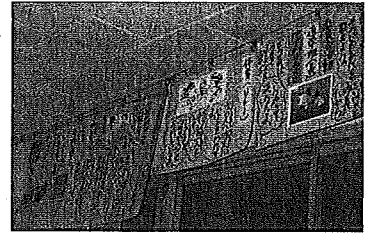
1 研究の特色

(1) 学習プログラム（総合単元的な道徳学習）の充実

道徳教育の全体計画に示した学校全体及び各学年段階の重点目標に沿って、学期ごとに学習プログラムを作成した。

学習プログラムの作成に当たっては、今年度、特に重視している業間遊びや異学年交流など、「人とのかかわり」の場を豊かにすること、そして、その体験の中での児童の心の動きと道徳の時間における指導とが響き合うようにすることに留意している。

- ① 作成に向けた実態把握
  - ア 児童アンケート
  - イ 保護者アンケート
  - ウ 教師の見取り
- ② 道徳的価値のつなぎ
  - ア 学習プログラムのあしあとの掲示
  - イ 終末の工夫
- ③ 自己のふり返し
  - ア ポートフォリオ的な評価
- ④ 個に焦点を当てた見取りと指導
  - ア 特にその価値に気づかせたい児童を核にした取組み
  - イ 個々の児童が主体的に道徳的価値を少しずつ高められるよう、児童の発達段階をつかみ、日々の活動の中で意図的に声かけをしていく指導方法の工夫

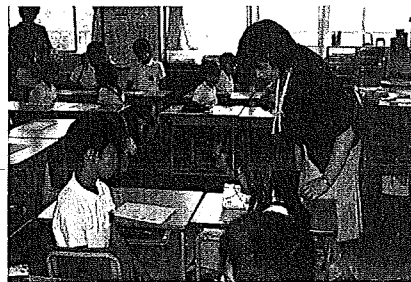


【学習プログラムのあしあと】

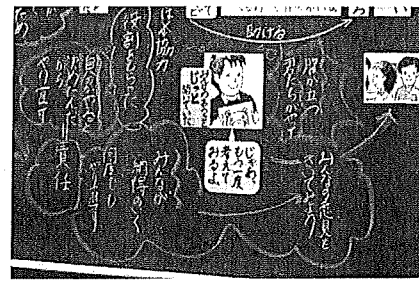
(2) 道徳の時間の充実

道徳の時間においては、児童が日常の体験を想起でき実感を深められる資料選択や発問の工夫、伝え合いを視点としたペアトークやクラストークなど話し合い活動の工夫、役割演技等の表現活動の工夫などを行っている。

- ① 伝え合いの工夫（道徳的価値の追求）
  - ア ペアトークやクラストークを通して、友達の思いや考えとの類似点や相違点を見つけさせ、自分の思いや考えをより深め、道徳的価値を追求させる。
  - イ 児童のつなぎ発言と指導者の意図的指名により、児童の思いや考えを整理し、児童の思考が深まる授業展開とする。
  - ウ 児童が、道徳的価値を比較・検討したり、心情の変化を読み取ったりするのに必要な内容を端的な言葉で構造的に板書をする。



【ペアトーク】



【板書】

- ② 子どもの心に響く資料提示の工夫
  - ア 基本的には、教師が資料を覚え、児童の目を見て語る。
  - イ 児童実態に応じた提示を工夫する。(ペープサート、劇、紙芝居など)
- ③ 児童の心をゆさぶる効果的な発問の工夫
  - ア 資料分析により道徳的価値を整理し、中心発問をねらい(心情や判断力、意欲・態度)に沿ってしぼる。
  - イ 中心発問をより深めるための補助発問により、思いや考えをゆさぶるなどして価値を深める。

(3) 学校環境の充実

- ① 人的環境の充実
  - ア 教師と児童との人間関係づくり(日記、面談、業間遊び)
  - イ 児童相互の人間関係づくり(業間遊び、縦割り活動、異学年交流)
  - ウ 家庭、地域との人間関係づくり(親子行事、ゲストティーチャー)
- ② 物的環境の充実

- ア 日常的に道徳実践ができる工夫（「気づく心」を育てる縦割り掃除）
- イ 環境美化や整理整頓（一人一鉢，靴箱の整頓）
- ウ 道徳性の育成にかかわる掲示の工夫（道徳コーナー，学習プログラムのあしあと）
- エ 美的情操の養成（全校合唱，図画工作の作品掲示，全校鑑賞会）
- ③ 言語環境の充実
  - ア ことばのスキルタイムの実施  
言語技術の指導では，場面や状況の設定を工夫して相手意識を明確にもたせ，生活の場でも使える言葉スキルを身に付けさせる。
  - イ 話型「伝え合うことば」・「話し方，聞き方」の掲示  
各教室へ話型を掲示し，どの教科等においても，指導者・児童が活用できるようにし言語スキルの定着を図る。

## 2 実践事例

- (1) 日常活動と他学年との交流と道徳的価値の自覚を深めていく実践

<役割と責任を果たす心を育てる学習プログラム（別紙配付資料参照）>

- ① 学年 第6学年
- ② 主題名 「責任ある態度」 中心項目 4－（3）役割と責任の自覚  
関連項目 4－（6）愛校心
- ③ ねらい  
「じゃあ，もう一度考えてみるよ。」と言ったぼくの気持ちを考えさせることを通して，役割を果たす責任の大切さに気づかせ，常に自分の役割と責任を果たそうとする態度を育てる。
- ④ 資料名 「メンバーとして」（心をつないで 教育出版）
- ⑤ 授業内容

<プログラムの説明>

6年生となった児童は，最高学年としての自覚を意識し始め，様々な場面でその役割に取り組んでいる。しかし，決められた仕事をするのが責任を果たしていることだという思いが強く，集団のために自分ができることを見つけて行う喜びを感じている児童は少ない。そこで，集団のために自分ができることを考え，進んで責任を果たしていこうとする態度を育てたいと考え，本プログラムを設定した。

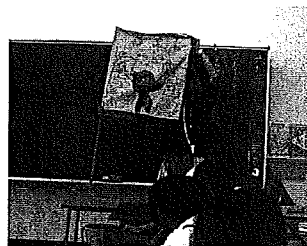
<資料観>

本資料は，遠足の事前の話合いでグループの旗のデザインを任された主人公の心の動きをめぐって話が展開する。なぜ，自分が旗作りをしなければならないのかなど，主人公のぼくは，はじめはいろいろ悩むこともあったが，結局自分が一切を任されたことによって役割と責任を自覚していく内容である。「メンバーとして」自分に何ができるかを考えさせ，そのよさや価値に気づいていける資料である。

<展開>

導入では，資料の内容との関連として，5月の全校遠足に準備したたてわり班の旗を見せることで，みんなでデザインのアイディアを出し合ったことを想起させることができた。

展開の基本発問では，友達に文句を言われ，旗作りの意欲がなくなった時の主人公の気持ちを考えさせることで，児童は自分たちの旗作りと重ねながら，気持ちを考えることができた。主人公が「やり直してみよう」と言った場面を問うと，児童から「えっ，どうして」と主人公の心変わりに驚いた発言が出てきた。そこで自分が体験活動を通して感じた思いと主人公の行動の違い



【体験を想起させる教材の提示】

- ① 日々の実践をつなぐ

- ② 体験の想起

に着目せ、じっくりと自分の考えをもたせ、話し合いを進めていった。その後、児童から「リーダーとしての苦勞を味わってきたからこそ、責任感を持つことの大切さを改めて感じたのではないか」という意見が出た。

③他学年との交流

展開後段で、自分の生活と重ねながら「たてわり掃除で低学年に教えていると、みんな少しずつ上手になっていくのが分かってうれしかった」という発言が出た。



終末では、他学年から6年生一人一人に宛てた手紙を読ませた。その手紙を読むことで、自分たちの活動が認められる喜びを味わい、役割と責任を果たす大切さに気づくことができた。

ぼくは普通にやっていると思っていたけど、下級生は感謝してくれていたのでびっくりした。これからも6年生として責任をもって行動したいです。

授業後、児童の大半が、「リーダーとして自分がしていたことがこんなに役に立っていると思わなかった」と感想を述べた。また、授業のアンケート結果からは、日常の活動とつなげて考えることができたことが分かる。

今までの生活や学習で感じていたこと（思っていたこと）を思い浮かべて考えることができた。	97%
自分の思っていることを伝え合う話し合いができた。	91%
友達の考えを聞いて、自分はどうかだろうと、もう一度考えることができた。	88%

【授業後のアンケート結果】

3 研究の評価

(1) 学習プログラムの有効性

①核とした児童の変容

「2 実践事例」として示した学習プログラムにおいて、特にねらいとする価値に気づかせたい児童は、A児であった。A児は、係の仕事をおぼえたり、登校班において、下学年をおいて、先に歩いていたりするなど責任をもって役割を果たすことが十分できていない実態があった。また、役割と責任について聞いた事前アンケートでは、「自分の役割を意識して行動している」といった項目について否定的な回答が8割であった。自分自身でも、責任をもって役割を果たしているとは思っていないと考えられた。そこで、自らの役割を果たしていけるように日々、声かけをずるなどの支援を行い、果たすことができた時は、しっかりと評価して自己肯定感を高めたいと考えた。

こういった取組みを行う中で、道徳の時間に「低学年をリードしたい」という意見を出したり、係の仕事を手伝ったりするA児の姿が見られるようになった。プログラム終了後には、係の仕事を進んで行う姿や登校班で1年生の歩く速さを考えて連れてくる姿などが見られるようになってきた。また、事後アンケートでは、すべての項目で肯定的な回答をしていた。これらのことから、A児は責任をもって自分の役割を果たす大切さに気づくとともに、自己肯定感を高めていったと考えられる。

②クラス全体の様容

このような特にねらいとする価値に気づかせたい児童を核とした取組みは、クラス全体の高まりにもつながっている。指導者が、どの児童に対しても、主体的にねらいとする道徳的価値に迫っていけるよう、発達の段階や児童実態を把握し、日々の活動の中で意図的に声かけをしていくようになったからである。その結果、児童は、主体的に自分は何ができるのかを考え、行動していけるようになってきた。

今後は、より客観的な評価を研究し、総合的に児童の道徳的価値の高まり等をとらえ、本校の研究の有効性や課題を明らかにしていきたいと考えている。